

古代から栄えた猪名川河畔

猪名川流域は古代から政治、経済、文化の中心である五畿内のひとつ、摂津国に属し「猪名野（いな野）」と呼ばれ、都の貴族たちが狩りを楽しむ遊猟の地、歌にも詠まれる歌枕の地であった。また、流域の多田盆地は源家の始祖である清和源氏の発祥の地である。明治以降の猪名川流域は水害と工業地帯の確立、人口増加に伴う水不足にたびたび悩まされた。治水と利水は猪名川の重要課題であった。1983（昭和58）年には、猪名川流域の洪水調節と流域各都市への上水道の供給を目的として、一庫（ひとくら）ダムが支流の一庫大路次川に完成した。

府県の枠を超える唯一の流域下水道

高度経済成長期には猪名川の水質悪化が著しく進行し、流域での下水道整備が喫緊の課題となった。しかし、一部地域を除き、下水道事業は未着手という状況であった。このような状況の中、水質改善には大阪府、兵庫県に跨る流域関係市が一体的に取り組むことが最善という認識がもたれた。そこで、1965（昭和40）年に流域5市で覚書が締結され、全国で唯一、府県を跨って運営される猪名川流域下水道が発足した。

下水広域処理の先進地域

大阪府では1970（昭和45）年に下水道法が改正され、流域下水道が法制化される以前から、広域下水道という考えのもとで広域処理を行っていた。下水道の広域処理では大阪が先行し、法律が追い付いてきたともいえる。兵庫県でも、人口密集地などの特質もあり、単独で処理するよりもスケールメリットが追及できる広域処理の方が、処理単価の安さにつながるという認識が関係者の間で共有されているという。府県に跨る広域的な下水道事業の今後に注目したい。

可能性を秘める下水処理場

猪名川流域下水道の処理場である原田処理場は、関係市のひとつである豊中市が維持管理、運営を行っている。目下の注目事業は、全量高度処理化と消化ガスを利用したFIT発電事業である。ところで、原田処理場に来て驚くことがある。それは目の前に大阪空港の滑走路が広がり、旅客機が離着陸を繰り返している光景だ。目の前の空港に“下水道資源”であるバイオマスエネルギーを供給ができないかと若手職員たちからの提案もあるという。

猪名川流域を訪ねる

原田下水道処理場を後に猪名川流域を歩く。処理場の前の堤防に立つと、どこにでもある工業地帯の河川敷。しかし、電車を乗り継ぎ数十分、川に沿って北摂山地を遡ると、住宅地のすぐ背後に一庫ダムが聳える。再び、電車で川沿いを下り清和源氏ゆかりの多田神社を訪ねる。僅か数十キロの中に、猪名川流域の軌跡が凝縮されている。最後に大阪空港を訪ねた。地下には、猪名川流域下水道事業と空港施設の兼用工作物として作られた大規模貯留管が通っている。日も暮れた展望デッキ。原田下水処理場の灯りも瞬いている。出発の準備をする飛行機を見ながら、先ほどの原田処理場の若手職員たちの提案を思い出した。高度成長期以降、川の水質を守って来た猪名川流域下水道には、より大きな可能性が秘められている。準備を終えた飛行機は、やがて冬の夜空に飛び立った。



写真左より、猪名川の流れ、一庫ダム、原田下水処理所の前の滑走路から飛び立つ旅客機